

Cブロック全作品

病



Yakushiji-temple @Nara

好きすぎて
苦しすぎるよ 恋の病

治せる人は
あなただけなの

病名…恋患い

〔症状〕（罹患者は特定の対象者にのみこの症状を有する）

空目の二度見

対象に少しでも似ている要素（服装や髪形など）を有する者を見ると対象であると勘違いして二度見した後にがっかりしてしまうこと。

空耳のちら見

対象に少しでも似た話し方をしている人を見ると対象であると勘違いして、ちら見。その後にがっかりしてしまうこと。

視界の隅留め

対象をつい見てしまった後に対象と目が合うと恥ずかしくなって目を逸らす、結局懲りずに視界の隅に対象をとどめてしまうこと。

最高にネガティブ症候

対象が少しでも異性と仲良くしているだけで、いろいろ考えてネガティブになってしまうこと。

最高にポジティブ症候

対象が自分に挨拶してくれたなどのとても些細な事で、対象が自分に気があるのではと舞い上がってしまうこと。

朝起きたら、肩幅が昨日までの三倍になっていた。

私はパニックになった。肩幅が二メートル以上ある人なんて、聞いたこともない。誰かに見られたらと思うと、もう生きた心地がしなかった。

このままでは事態は変わらない。なにか解決策はないものか。いったん深呼吸をしたところで、部屋を見渡すと、着ていたはずのパジャマがびりびりに裂けていた。そう、うか、今私は上裸なのか。服を着なくては。そう思って部屋を出ようとしたら、ドアにぶつかった。部屋から出られない。体を横にしてみても、肩が引かかって出られないのである。これは困った。これでは病院に行くこともできない、というかそもそも病気なのかもわからない。とりあえず、私は毛布を羽織った。

そうしているうちに時間はどんどん過ぎていった。

ああ、私はこのまま一生、この部屋から出ることなく、この肩幅で過ごすのか。そう思うと、自然と涙が出てきた。そのときである。涙が肩に落ちたと同時に、みるみる肩幅が元通りになっていったのである。

気がつくとい私は、部屋で毛布に包まって寝ていた。

あれは悪い夢だったのか、そう思って肩を見てみると、壁でぶつけたかのようなあざがくつきりと残っていた。

始まりは路地裏のバーだった。麻薬取引や吸引の場所として予てよりマークしていたそこに強制立入を敢行した取締官が見つけたのは中毒者と思われる者たちの死体だった。この発見を皮切りに、あちこちで似たような死体が見つかるようになった。不思議なことにその誰もが所謂麻薬を摂取した形跡のある者だった。当初は新型合成麻薬によるものだと考えられたが、調査が進むにつれて違うと判明した。この頃から、麻薬取締部だけでなく、警視庁や公安も捜査に参加するようになった。私もその一人である。

本件の凶器はウイルスであった。ただのウイルスではなく、緻密に設計された人工物だった。詳細は未だ不明だが、このウイルス、基本的には風邪等と大差無い程度の威力であるが、体内で微量でも麻薬由来のある種の成分と出会うことで死に至るまでの凶暴性を手に入れるのだ。死亡者と同じ場所で感染したと思われる売人が体調不良を訴えても死ぬことはなかったのもそのためだ。

新型麻薬登場、謎の致死ウイルスと当初は怯えていたメディアも市民も、今や安心して日々を送っている。なんせ死ぬのは『犯罪者』だけだからだ。事件をきっかけに薬物乱用者の自首も増え、一方でその産業は急激に縮小していった。一連の犯人を英雄と称える人もいる。

それでも私達の立場からすれば、犯人は逮捕しなくてはならない。ウイルスの性質が分かれば、容疑者を絞るのは容易だった。あんなモノを生み出せる人物は一人しかない。

目羅博士は世界的にも著名な医学博士である。彼の研究は花粉症から医療機器開発まで幅広く、そのどれもで偉大な成果をあげてきた。特に、ウイルスとワクチンに関する論文は数も、それが世界に与えた利益も膨大であった。彼は多くの命を救った英雄だった。いや、大衆にとっては今も英雄なのかもしれないが。

刑事である私の仕事は主に情報収集であり、感染症を疑いだした頃から、何度か博士の元を訪れている。私に専門的なことを教えながら彼は何を思っただろう。今思えばヒントばかり与えられていた気がする。急に自分が情けなくなつて息をついた。車窓の向こう、見慣れてきた山の上の研究所はその灰色の巨体で今日も私を見下ろしていた。今日私が来た理由はもう分かっているだろうに、博士はいつもの穏やかな顔で私を部屋に通すと、

どうぞかけて下され、と微笑んだ。喜寿も近いその老人はいつもの白衣のまま、反対のソファに腰を沈めると、腕を組んで私を見据えた。

「犯行手段も手順も、もう知っているのじやろう」
私はええ、と頷いた。

「何年前じやったかな。アレを見つけたのは本当に偶然じやった。私は興奮したよ、特定の人間のみ殺すウイルスだなんて。それからずっと、アレの研究だけをしてきた。改良に改良を重ねて作り上げたのがあのウイルスじや」

博士の表情はなお穏やかで、とても刑事と対峙した犯人のそれではなかった。

「私は病を治し無くすことを使命と思って生きてきた。アレに出会った時、これも私の使命だと思つたんじや。私が殺した奴は皆、法を犯し、秩序を乱し、人々の生活に影を落とす悪党じや。奴らこそ、クスリこそ、この世の病じやろう。そんな奴らを排除した私の何が悪いというのじや」

「犯罪者なら、殺してもいいと？」
「悪性腫瘍は切り取るものじやろう」

博士は平然と言つた。これが私の正義だと。確かに麻薬は犯罪で、私達としても無くしたいものだ。だが、殺人を認めるわけにはいかない。

「何を言おうと、ここが法治国家である以上、貴方のした事は、殺人で、犯罪です」

私は刑事だ。法の下で働く一人だ。これが私の正義だと私は博士に訴えた。

「彼らをガンだというのなら、貴方は自己免疫疾患と同じじやないのですか？」

体を守るための免疫が過剰に働き、正常な細胞や組織までも攻撃する。死亡した中にはまだ更生や将来の可能性があった者もいただろう。遺族の悲しみは考えなかったのか。ウイルスの正体が分かるまで、人々の生活に影を落としたのは貴方だ。

「私が、この私も、病だと……？」

博士は硬直していたが、暫くしてわなわなと震えだし、頭を抱えてソファに深く沈んだ。私は正しい。私は正義だ。そう口内で繰り返していた。

博士を乗せた車両を見送り、灰色の壁に寄りかかって、私は息をついた。英雄と言われた男の最後に不安が募る。私の信じる道は真つ直ぐだろうか。私の正義は正しいのだろうか。いつかは、歪んでしまわないだろうか。

それを否定するように、私は強く拳を握つた。

「正義の病」

君は大丈夫？ ～大学生生活習慣病～

【早く起きま症】

大学生によく見られる重病。症状としては、頻繁な寝坊がよく見受けられる。特効薬はまだ開発されておらず、一限の出席確認の廃止など、大学側の柔軟な対応が求められている。

【課題溜め込み症候群】

大学生によく見られる重病。多くの課題を当日の明け方まで溜め込み、発狂または諦めるなどといった重い症状があらわれる。早く起きま症と併発するケースも多い。特効薬はまだ開発されておらず、課題を出さないなど、大学側の柔軟な対応が求められている。

【帰りたい病】

大学生によく見られる重病。軽いケースでは午後くらいから、重いケースでは通学途中で「帰りたい」という気持ちが止まらなくなる。放置しておくと、休みたい病に進行する可能性が高く、早期の発見が大切である。特効薬はまだ開発されておらず、全ての授業を廃止するなど、大学側の柔軟な対応が求められている。

【休みたい病】

大学生によく見られる重病。毎日「休みたい」という気持ちが止まらなくなる。最悪の場合、留年に至るケースもある。特効薬はまだ開発されておらず、患者はもう諦めるべきである。

給食の揚げパン。

休み時間のサッカー。

冬の雪合戦。

学校祭の準備。

放課後の部活。

初恋。失恋。

悩みを打ち明けた夕暮れ。

卒業までのいとおしい日々。

どんな小さなことでも笑いあえた日々。

本気で大人になりたくなかったあの頃。

僕らが失いたくなかったものはそんなちつぽけ
だけど、キラキラしてて二度とやってこない毎日
だった。

く 1707年 静岡にてく

あー やべー

優れねーで候 主に体調が優れねーで候

これ熱でござるわ 久しぶりの熱でござるわ

だいたい200年ぶりの熱でござるわ

昨日の夜地震あったからだ まじねれなかったでござるし

まじふざけんなでござるし

やべー くしやみ出そうで候

2世紀分のくしやみ出そうで候

五重塔レベルのくしやみ出そうで候

我慢できなへえツツくくしよいゴルアアア

こうして江戸時代の宝永大噴火は起こったのである。

富士の病

余命半年だと言われたのは、若葉も色鮮やかな初夏のころだった。

側にいると言ひ張った僕に、彼女はその命を燃やしているかのように怒り狂い、
激しく抵抗したものの、夏を迎えるころには頑固な僕に呆れ、納得した。

彼女は花が好きだった。とりわけ、桜を愛した。

春まで死ななかつたらまた桜を見に行きたいと、縋り返し言っていた。

彼女はさいごの日々を穏やかにすごした。

そして限りある時間のなか、全てをいとおしんだ。

いつも、うるさいと不機嫌そうにつぶやいていた蟬の声を聞いて、彼女は眼を
細めながらどこにいるのだろうと見回した。

気持ちが悪いと、決して近づかなかった蟬を見て可哀想にと言った彼女に、僕
はたまらなくなった。

秋が来た。彼女の命が燃え尽きようとしているのを、僕は感じていた。

涼やかな虫の音に、彼女は何を思っていたのだろう。

本々の葉がいちまい、いちまいと落ちていく姿に自身を重ねていたことを、僕
は知っている。

冬が来た。医者予想した期限は過ぎていた。

彼女は雪が見られるとは思わなかったと笑い、桜も見られたらいいのにとつぶ
やいた。

雪に触れて冷たいと言った彼女の手には僕は触れ、その冷たさに目を伏せた。

春が来た。桜は花開いた。暖かな日に、僕は彼女を連れ出した。

彼女は舞う桜をぼんやりと眺め、雪が綺麗だつぶやいた。

抱きしめた彼女の髪は、彼女にはもう訪れることのない春の匂いがした。

そうして、桜が全て散るころに彼女は息を引き取った。

病ンデルワールス力

- ・ ヤンデレ※と恋人の間に働く力の一種。
- ・ 好きな人にすぐ近づくと急激に強くなる。(恋人への愛情と独占欲によるもの)近づきすぎると(恋人が)反発することがある。
- ・ 心の中の考えが何らかの理由で偏って起こる。多くのヤンデレは恋人同士になった当初から愛情によって独占欲を持つ傾向がある。その他にも、自責の念などで自発的に偏る場合と、恋人が他の異性と歩いているなどの外部要因によって偏る場合がある。
- ・ この力でヤンデレと恋人がくっつくことがある。
- ・ ファンタジーにおいてはこの力が主に働いて、関係が冷えた時に新たな展開を作ったりする。
- ・ 恋人への愛情が大きくなると力が強くなる傾向がある。
- ・ 他の異性に邪魔をされやすい。

ファンデルワールス力

- ・ 分子と他の分子の間に働く力の一種。
- ・ 分子同士がすぐ近づくと急激に強くなる。(ロンドンの分散力によるもの)近づきすぎると強い力で反発する。
- ・ 分子の中の電子が何らかの理由で偏って起こる。極性分子の場合は最初から電荷が偏っている部分がある。その他にも、電子の量子論的挙動によって自発的に分極する場合と、極性分子などの外部電荷の影響を受けて分極する場合がある。
- ・ この力で分子同士がくっつくことがある。
- ・ 無極性分子においてはこの力が主に働いて、温度が冷えた時に固体を作ったりする。
- ・ 分子の分子量が大きくなると力が強くなる傾向がある。
- ・ 他の分子に邪魔をされやすい。

※ヤンデレ 恋人が好きすぎて精神的におかしくなった状態、またはそうなった人。

「おい、それ以上俺に近づくな。
いまの俺の能力は誰にも制御しきれない。
命が惜しくば離れたほうが賢明だぜ。」

「あなたの風邪は、どこから？」

「風？ 自分の道はすべて自分で切り開いてきた。
はなから風なんかに乗るつもりはn・・・」

「鼻からですね？」

鼻からくる風邪には黄色のベンザ○ロック。」

♪あたらしい風邪にねらいをきくめて、ベンザ○ロック

今、私の目線の先には彼の上履きがある。入学してから約八ヶ月間使われ、薄汚れている彼の上履き。それでも清潔感のある彼の上履き。毎日毎日、彼が履いている、彼に踏まれている上履き。

そんな素晴らしいものが、今私の目と鼻の先にある――

私は彼のことが好きだ。どうして好きか？ 彼への想いは、そんな簡単に言葉で表せるものではない。彼のことを考えるだけで心びよんびよん。夜も眠れない。これぞ恋の病だ。そして、好きになった人のことは、なんでも良く思ってしまうものである。例えば、普通の人なら絶対に好まない、靴のにおいであっても。

放課後の昇降口。帰宅部は我先にと帰路に着き、その他の生徒もそれぞれの部活に励んでいるこの時間。この場所には私以外誰もいない。つまり、今なら彼の上履きのにおいをかいても誰にも咎められることはないということだ。

改めて目の前の下駄箱の中を見つめる。かきたい。体の奥底からあふれ出す、この今世紀最大の欲求を抑える理由はない。大丈夫、誰もいない。窓から降り注ぐ夕日の鮮やかなオレンジと、裏山から聞こえてくる静かな虫の音が、よりいっそう私と彼の上履きとの空間を幻想的なものにし、私を応援してくれているように感じた。

全ての神経を嗅覚に注ぐため、目を閉じ、心を落ち着かせる。少しずつ鼻の先を、下駄箱という名の宝宝箱に収められた彼の上履きへ近づける。肺中を彼のおいで満たすため、ゆつくりとお腹から息を出す。

今かがずに、いつかぐんだ。

さあ、夢の世界へ！

恐る恐る慎重に鼻から息を吸い込む。すると、かすかに昇降口の砂と埃の混じったものとは異なるにおいを感じた。

つんと鼻をつく、ちよつとすっぱいにおい。少し汗のにおいもする。だが決して臭くない。お日様のにおいまでする気がする。なんだろう。この何とも言えない芳しい香りは……これが彼の上履き。ああ、私はこの上履きになりたい。毎日彼のしなやかな足を優しく包み込み、様々な危険から身を挺して守る。誰かに踏まれようとも、牛乳をぶっかけられようとも、犬の糞と接吻するはめになろうとも、私は彼の体を支え続けることを、ここに誓います。

微かな風が前髪をふわりと揺らした。

――井波さん。

上履きの神様のおかげだろうか。私の名前を呼ぶ声が脳内に響き渡った。その声は、とても彼のものに似ていた。

「あの一、井波さん？」

……ちよつと待て。上履きの神様？ そんな妄言を吐いている場合ではない。彼によく似た声は脳内などではなく、明らかに私の背後から聞こえていた。油の切れたロボットのようになぎこちなく私が振り向いた先にいたのは、やはり彼だった。

「ち、違うの！ これは……」

「恥ずかしがらなくていい。実は、僕も井波さんと同じ上履きのにおいフェチなんだ。こんなところに同志がいるとは思わなかったよ。ぜひ、井波さんとおいについての意見を交換したい！」

「えっ？ あ、はい……喜んで」

こうして、彼と私の奇妙な恋愛が幕を開けた。

おかあさん、

ぼくが仮病で学校休んでるって知ってるくせに。

本当はおなかなんて痛くないって知ってるくせに。

さっきだって、おかゆじゃなくておっきなおにぎりを持ってきたじゃないか。

なのに、理由をきいてくれない。

これじゃあ、ずっと病気のふりをして

大好きなおにぎりを残さないといけないじゃないか。

おかあさん。

クラスのやつが、ぼくを土くさいってからかうんだ。

おかあさんが工事で泥まみれになって働いてるのを見たんだって。

だから、おかあさんの作るごはんもぼくも土くさいんだって。

おかあさん。

ぼくは知ってるんだ。

おかあさんは悪くないって。

ぼくをからかうやつらが悪いんだって。

なのに、おかあさんが悲しむかもしれないから、

なかなか言えなくて、

でも気づいて欲しくて、

どうしようもなくて、

今日もまたぼくは嘘をついて学校を休むんだ。

ごめんなさい。　おかあさん。